



外国人教師の 目で探る新潟(日本語)

世界各地で生まれ育ち、本学で教鞭をとる教員たちが、多文化的視点で新潟県の魅力を語り合い、大学の授業とは一味違う切り口で地域の特徴を掘り起こしました。

新潟のまちの魅力発見

会場 有明 新潟市中央区古町通り9番町1463番地

日時 平成21年11月28日 13:00~16:00

協力 新潟まち遺産の会
(財)新潟観光コンベンション協会

参加者 42名

韓国・英国・米国出身の3名の講師がそれぞれの国との比較などさまざまな角度から新潟のまちの魅力を検証しました。

プログラムおよび講師

1 古町花街と有明について(対談)

有明三代目女将 山田 晴子 さん

2 芸妓の舞と芸妓さんとの一問一答

あおいさん、春花さん、いね子さん

3 新潟のまちへの提言

「韓国 清溪川の歴史と現状について」 権 寧俊

「水路について」 John Adamson

「ピッツバーグの橋そして新潟のダウンタウンの歩行性について」

Bethany 伊與部

4 新潟のまちの魅力発見(鼎談)



古町花街と有明について



芸妓の舞



芸妓さんとの一問一答

講師紹介

権 寧俊 (クォン ヨンジョン)

韓国出身/新潟県立大学 国際地域学部 国際地域学科 准教授

一橋大学大学院言語社会研究科にて学術博士号取得。

専門分野は、東アジア歴史や言語社会学。

現在は精力的に論文等を執筆中。日本滞在16年目。

John Adamson (ジョン アダムソン)

英国出身/新潟県立大学 国際地域学部 国際地域学科 准教授

英国レスター大学にて教育学博士号取得。

専門分野は、教育学、応用言語学、社会言語学。

数年のビジネス経験の後、23年に亘って英語教育に携わる。現在は学術雑誌の編集長等も務める。日本滞在15年目。

司会兼コーディネーター

Bethany 伊與部 (ベサニー いよべ)

米国出身/新潟県立大学 国際地域学部 国際地域学科 講師

英国アストン大学にて科学修士号取得(TESOL)。

専門分野は、英語教育、バイリンガル能力。

新潟県内にて英語教育(外国語指導助手ALT)に従事し、平成16年より新潟大学准教授、平成21年度より新潟県立大学に就任。日本滞在14年目。

山中 知彦 (やまなか ともひこ)

東京都出身/新潟県立大学 国際地域学部 国際地域学科 教授

東京大学にて工学博士号取得。

専門分野は、住宅・住環境設計、景観・都市デザイン、まちづくり活動支援。

主な業績として、グッドデザイン賞(熊谷市市役所通線 2000)、さいたま市景観賞(西野邸 2002、本村邸 2002、ヒアシンスハウス 2006)他受賞。

1 古町花街と有明について (対談)

有明三代目女将 山田 晴子さん／聞き手 山中 知彦

山中 それでは、最初のプログラムとして、有明の三代目の女将、山田晴子さんに私からいろいろ、根掘り葉掘りお話を伺うという企画なんですけど。ということで、女将はお生まれもこの近くだって伺いましたが。

山田 そうですね。三越の向かい。今の安田信託のところに、私は生まれました。嫁に来たらほんの何町も離れたところでないものですからね。よく、ほら、お嫁に来ると里帰りなんていうのがありましたけど、全然そういうこともなく。

山中 まず、女将の思い出の中の一番古いものをたぐっていただいて、この辺の古町ってというのはどんな様子でしたか。

山田 私たちの子どものころは、とにかく堀があった。私の生まれたところは西堀5番か6番町でしたから、遊ぶのにも何もまず堀。それから堀につながりますお寺。そこを遊ぶところにしておりました。

山中 まだ堀は、船で荷物を運んだりって、生きてたんですか。

山田 生きてましたね。そのころは、お米はといておりませんでしたけれども。

山中 堀でお米をといた時代もあった？

山田 あったんです。子どものころ、洗濯物の初めのすすぎをやった覚えがございませ。そして、うちへ持ってきて、最後にお水で洗う。子どもながらも、そういう大人の手伝いというものをやっておりましたね。それも、遊びがてらやりましたから。苦にもなりませんすね。

山中 いつごろの年ごろに堀が？

山田 堀は国体のときに埋めたんです。私たちは、昔お風呂屋さんから出てきて、あそこで下洗いをちょっとさせてもらったのを、またここで洗って。それで、持って帰ってっていうのもありましたですね。

山中 そうやって堀になじみながら育て、有明に嫁がれたころには堀は？

山田 まだ、ございました。イタリア軒も、昔のイタリア軒でございましたしね。普通は西堀のところは木の橋でしたけれども、

あそこだけはコンクリートの橋だったんですよ。そこに、柳がかかっているところに、今でいえば振り袖さんですわね。昔は半玉さんって言って、玉代が半分だったもんですから、半玉さんって言われる子どもさんたちが、こんな高いぼくりを履いて、振り袖を着て、よく行き来するのを「きれいだな」というふうに、まさか自分がそういう方々に携わるところに嫁に行くとは思わないで、見ておりましたね。

山中 それで、なぜ携わるようになったんですか。

山田 私の父が、新潟商業の先生をしております。今のように女の子のいる商業でなくて、本当に男ばっかしで。サラリーマンとかお医者さんのせがれは新潟中学。こういうところとか、商家のせがれはみんな商業へ行った時代なんです。うちの主人は教え子だったんです。色っぽい話は全然ないようなところから、嫁に来ましたんです。

山中 それは親の一存で、そういうことではないでしょう？

山田 これは私ごとでございませけども、いいことばかりではございませんで、たまに夫婦げんかなんかしますと、「私だって、あの時代でなくて、今の時代だったら男の人を選ぶ権利があったわ」という話でね。

山中 嫁がれるということは、料亭を継ぐということが分かっていたわけですね。

山田 いえ、それは全然分からなかったから、かえって良かったんじゃないかと思うんですけど。まず親から言われたのは、そのうちに、行ったところに最善を尽くすこと。それから、自分欲をしないこと。水でも高みから下へ流れていくところで清くなっていく。そのところに自分のかめを取っておけば、必ずおりがたまる。それでは清くないから、とにかく上から来たら下へ流してやるというようなことを言われたのは、当たり前だと思ってきましたけど。だから、ここに嫁いで一生懸命にやっ

ただけですね。好きだの、嫌いなのなんて、そんな選択なんかなかったですよ。

山中 ご主人は、こちらの跡取りだっていうのは分かってたわけですね。

山田 そうですね。料理屋さんの小三さんとか、金寿さんってございますよ。その先代のご当主なんかも、全部うちの父に教わったもんですから、その方たちがね、うちの父を慕って来てくれたもんですから、そういうのはちょこちょこ耳に入ってはおりましたんです。

山中 実際お嫁に来て、当然先代の女将の元で修行を始めるんでしょうかね。その辺のいきさつとか、経験をちょっと。

山田 私の姑というのは足がお悪くいらっしゃって、お座敷に上がらないんですよ。義足でいらっしゃいまして、それでお座敷は女中さんに任せていらっしゃったんです。その代わり、「いらっしゃいませ」と、「またのおいでを」ということは、帳場にお座りになって言っていたらいいですね。ですから私を早く大人にして、そして代を継いで、私に渡そうと一生懸命思いになったらしいんですわね、後でお聞きしましたらね。それで、自分もそれに応えとかそういう大きい気持ちなんかなかったんですけれども。私は今になって思いましたら、私の好きなようにやらせていただいたんですよ。「前の慣習はこうだから、こうしなきゃ駄目だ」とかって言わないで、私が困ったときに相談すると、「昔はこうだったんだけどね」と教えてくれましたけどね。そういう点では、本当にいいお姑さんでございましたね。

山中 お話を伺うと、有明は、創業当時は魚屋さんをやられてたっていう。

山田 そうなんです。本町で、新潟の市場に採れた魚とかそういうのを、川をずっと伝って、御祭堀に本家がございまして、そこに荷物を運んでいった。初代の方が初めは棒手振って、分かりますかね。

山中 引き売りですよ。

山田 はい。それが頭がよくいらっちゃって、だんだん蓄積して行って、問屋さんになってね。最後は、商工会議所の役員までおやりになったっていうのは聞いていましたけども。

山中 女将が嫁いだ当時の、それこそ女将教育を受けているころの花街の様子っていうのは、どんな感じでしたか。

山田 今でいう振り袖さん、はなもくさんがいっぱいいらっしやましてね。そして、おばあさんからお母さん、娘さんと3代続いた芸者、芸妓さんがいっぱいいらっしやいました。おやめになってもそこで、覚えた身の芸っていうんですか、そういうものを生かして、お茶の先生をなさったり、いろいろなことで、70になっても80になっても、それこそ今でいえば働いているんですよ。たまげますのは、いつでもきちっとしているんですよ、格好が。休みであって、そこらに買い物に行っても、きちっとしていらっしやる。今の若い子さんたちがガラガラとして、休みでもそのまんま。私も昔の言葉で、よく、「ねまきおきまき」っていった言葉があるんですけどね。

山中 ねまきおきまき？

山田 寝間着でそのまんま、起きても寝間着を着て騒いでいるっていうんで、「ねまきおきまき」って言ったもんですけどね。芸者衆はそういうことでなくて、いつでも誰かに見られているという視線を常に感じて。街の中を歩くにもきちんとして歩いて回ったですよ。昔からの礼儀作法っていうんですか、そういうのは堅苦しいようですけども。私は、今はこれが人間として一番大事なことだと思いますわね。この前お客さんに申し上げたら、「あんた、今ごろは、『恥を知れ』なんていう言葉なんかはないんだよ」って言われるんですけども。自分の中に、「これ以上になったら、自分が恥ずかしいんだ。そういうことはやっちゃいけない」という、誰か見ていなければしたっていいとかっていうんじゃないかと、自分自身をきちんとして、そこでとどまるというような教育っていうのが大事だと思いますね。

山中 だいぶ時代も変わって、芸妓さんも

数が減って、料亭の数がだいぶ減りましたよね。ぜひ、こういう料亭を頑張って続けていていただきたいと思うんですけども。女将が先代から引き継いで、今、若女将、4代目の女将に引き継ぎたいっていうことがあれば、どんなことでしょうか。

山田 ただ私のやってきたことを、見てちょうだいっていうことと。それが、ただ先代から言われたのは、これもたとえば昔風で古うございますけれども、玄関の敷居はお客さまが付けてきてくださる靴や草履の土でもって成り立つんだということを、おばあちゃまから承っておりますから。

山中 それは、いい表現ですね。今の時代にこういう花街、どういうふうになっていったらいいと、お思いですか。

山田 昨今、先生がおっしゃったように、古町に来て、こういうところへどういうふうにして上がっていったらいいんだかが分からない。皆さん、そうだと思うんです。行ってみたい気持ちがあるんだけど、どういうふうにして、まず戸を開けて入ったらいのかというのが第一歩。その第一歩を商工会議所や市役所、先生方の学校とか、まち遺産の会の方も今やっぴらっしやいますね。新潟にはお米とお酒、昔から米の白さと雪の白さと、女性の肌の白さということで、三白と言ったんですけど、3番目の女性の芸者さんというのは、県外からいらっしやいますと、お酒を飲んで、芸者さんをあげたいというのがあるんですよ。私たちもいろいろなところへ行って、アピールしますんですけども、商工会議所とか市役所とか、先生方、知事さんが今広げていってくださっているふうに、本当はうれしくて、歓迎いたしております。

山中 間口を広げるような工夫は必要なんだけども、伝統的な世界っていうんですかね、それもぜひ残していきながら、開いてほしいと思います。

山田 それが一番。ただ、迎合するのではなくて、そして守っていかなければならないことは、やはりきちんとして。今、とにかくお箸の持ち方から、物の食べ方、残し方、そういうものがほんと、お偉いさんでもま

ちまちなんですよ。きれいにお箸を使ったり、置いたりする方を見ると、「お育ちがいいんだわな」というのを感じるんですよ。玄関でお脱ぎになったり、お履きになったりするときのちょっとした動作なんですけど、「ご家庭がしっかりしているんだわ」っていうようなのを感じるがあります。

山中 ちょっと、耳が痛いです。

山田 端々にそういうのが見られますと、「この方は、これから偉くなられるのに、こんな食べ方じゃ駄目だ」、「こんな残し方じゃ駄目だ」というと、ちょこちょこっと、説教っていうんでしょうかね、お教えするんですよ。そうすると、「ありがとう」って言ってくださる方が10人に一人でもあると私はいいと思って。お客さまに、「私は説教ばあになっているの」ってね。「今、そういうふうな説教ばあがないから、いいよ。やれ」なんて言われて、説教ばあになっております。

山中 話は尽きないんで。最後に一言、女将から会場の皆さんに説教を。

山田 皆さま、きょうは本当にありがとうございました。先生方のこういう企画においていただきまして、また、私のうちの古い明治の建物などでございますけれども、またちょこっとでもご覧になっていただいて、ぜひ、きょうの芸者衆の踊りとか、そういうのを皆さん、「よかったよ」と、お帰りになったらお一人にでもお二人にでもおっしゃっていただけたら。いろいろな企画でもって、芸者さんとお弁当とかってございますから、そういうのをご覧になって、ぜひご参加くださいますように、お願いいたします。

山中 ちょうど時間になりましたので、終わらせて頂きます。ありがとうございました。

2 芸妓の舞と芸妓さんとの一問一答

あおいさん 春花さん いね子さん

山中 今日の講師と芸妓さんとの一問一答ということで、まず、権先生ですけども。

権 私は春花（はるか）さんに質問したいと思います。まず芸妓になる資格というものは、何かということですか。

春花 高校を卒業してから、今は入らせていただいています。おねえさんたちのころは、もっとお若いときに入れたんですけども。

権 養成機関とかはあるんですか。

春花 柳都という置屋さんを、会社組織にしたところなんですけれども、そこに若い芸妓さんが8人います。

権 学ぶ期間というのがありますか。

春花 お披露目までは、大体1カ月か2カ月ぐらいなんです。その間に一つか二つ踊りを覚えて、お座敷に出させていただくんですけども。それからずっとお稽古は続きますし、ある程度おねえさんになったらお袖を短くして、ステップアップするというかたちですね。

権 そういう教育を受けるときに、難しいことは？

春花 正座をしたりとか、着物を着ながら動くのが最初は難しかったですね。

権 化粧をするときに、どれぐらい時間がかかるんですか。

春花 お化粧は、私とあおいちゃんは結構早いほうなので、20分ぐらいでできるんですけども、大体お座敷の2時間ぐらい前から支度を開始しますね。お化粧したり、着物を着たり、かつらを被ったりしないといけないので。

山中 アダムソン先生、どうぞ。

アダムソン 私はあおいさんに聞きたいと思います。芸者さんの言葉は、すごい丁寧ですね。高校生の間には、普通の日本語をしゃべるでしょう。芸者さんの言葉は、どういうふうに普通の日本語と違いますか。

あおい 皆さまが想像される花柳界は、京都が一番有名ですけども、京都は全国からいらっしゃるので、特に花柳界弁という

のをつくって、京都の花柳界の言葉というのを徹底的に教えるんだと思うんですけど。新潟は、県内の子しか取らないので、私たちはなるべく新潟弁を使うようにはしています。私たちは本当だったら、自分の年齢ではお会いできないような方々に毎日お目にかからせていただいて、お話を聞く機会もたくさんあります。最初に出るまでの期間がすごく短いので、出てからずっとおねえさんの後ろをくっついて、お座敷の中で一つ一つ教えてもらいながら、自然と丁寧になっていきますね。やっぱり、人とお話をさせていただくという心掛けとか、心持ちを教わりながらしていきますので。汚い言葉を使っていたら、お客さまは呼んでくださいませんし。あとは、この方はこういう話をこの間してくださったからとかいう内容は、少し勉強させていただきながらやっています。

山中 次の質問は、今日ご欠席の伊與部先生からいね子ねえさんになんですけども。芸者さんになられたころには考えてもいなかったような困難がありましたか。それと、そういった困難をどうやって乗り越えてこられましたか。

いね子 私は中学3年卒業してから16歳で出たんです。だから右も左も分かりません。いろいろ稽古したり、ある程度三味線か、お囃子。全部覚えなきゃ駄目だったんですよ、そのころはね。私たちのころは芸者衆が200人いたんで、一生懸命稽古をしなければ置いていかれますから、いろいろ大変でございました。飲めないお酒も、飲まされましたよ、昔はね。

山中 それは、飲めるようになるんですか。

いね子 なるんですよ。ほんとに目が回って、具合が悪くなるんですけど、失礼ですけどトイレへ行って、ちょっとして、それでまたこうやって飲んだんですね。今はそういうことはありませんけどね。

山中 あおいさんと春花さんは、どうして芸者になろうって思われましたか。

春花 私はたまたま、高校生のときにこういうお仕事があるっていうのを知ったので、それでやってみようかなっていう気持ちで、入らせていただきました。

あおい 私は、6月に芸者衆だけの踊りの会がありまして、その会を見せていただいたときに、こんな世界があるんだというのを初めて知って。私の興味はそこに向いたので、その世界を知ってみたいと思って飛び込んでしまいました。

山中 結果はどうでした？

あおい おねえさん方もずっと今でもお稽古されてて、ほんとにどこまでもやろうと思えば登っていける世界だと思うので、逆に面白いんだと。大人になってからも、宿題が大変だと思いませんでした。

権 なぜ、芸者さんは化粧を白くするんですか。何か、意味がありますか。

あおい 昔はろうそくの明かりしかなかった時代ですから、顔がよく見えるように、白く塗ったという説もあるみたいですけども、はっきりとは分からないですね。

アダムソン いろいろ勉強しなくてはいいかもしれません。でも、もちろん自分の健康について注意しないとイケません。特別な食事、生活がありますか。

あおい 私は20歳を超えたので、お座敷でお酒をいただくことも少々ありますけれども、なるべく外食じゃなくて、やっぱり自分で作ることだと思いました。私たちは寮で暮らしているの、なるべく自炊をして、必ずお野菜をたくさん食べたりとか、ジャンクフードに頼らないとか。

春花 やっぱり毎日お化粧するので、最初のころは、おしろいが付かなくてお座敷に出られないっていうときもあったので、お肌には十分気を付けるようにしています。

山中 本来は差しつ差されつつで、やりたいところなんですけども。これで、クエスチョンアンドアンサーのコーナーは終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

3 新潟のまちへの提言

講師：権 寧俊、John Adamson、Bethany 伊與部

「韓国 清溪川の歴史と現状について」

権 寧俊 [韓国]

今日は、今韓国で、最近観光名所になりました清溪川（チョンゲチョン）という川の歴史の話をしたと思います。まず、朝鮮王朝時代にはこの川を挟んで、北には貴族階級の両班たちが、南には没落した両班と一般の庶民たちが居住していました。1910年の日韓併合で、北は朝鮮人たちが居住する地域に、南は日本人たちが居住する地域になったわけです。北は朝鮮の伝統的な洞（ドン）という地名の名称を使っていましたが、南は、例えば明洞（ミョンドン）が「明治町」、忠武路（チュンムロ）は「本町」というふうに日本名に変わります。北は朝鮮人が住んでいましたので、植民地時代は電気があまりない。夜になると真っ暗。でも南は、電気をつけるところがかなりあったので、夜になってもかなり賑やかな街だったという話もあります。解放後の清溪川の歴史を見ると、50年代以前は主婦たちが洗濯をしたり、子どもたちが遊ぶ場所にもなってきました。1950年に朝鮮戦争が起ると、北から戦争を逃れた避難民たちが清溪川に集まってスラム化した住宅が並ぶようになり、不潔と貧困のシンボルになってきました。

これを何とかしなきゃということから、川にふたをしてその上に高架道路を建設する計画が始まります。それ以前の1918年から、朝鮮総督府がふたをして道路をつくるという計画を立てますが、清溪川は昔から下水の役割も果たしてきたので、高水位のときに排水が難しくなるという理由から実現できませんでした。それでも、清溪川の計画は続いて、35年にはふたをしてその上に高架道路を建設する計画が、39年には自動車専用道路をつくるという計画が、40年には上に電車を走らせるという計画もありました。そういう計画は、すべて実現することはできませんでした。満州事変や日中

戦争、太平洋戦争とか、戦争をするために財政が足りないという理由からでした。戦争が終わって58年から本格的に計画が始まり、ふたをして高架道路をつくったのが1971年。それで、車がいっぱい走るようになったわけです。清溪川は経済発展のシンボルになり、川の役割を喪失しました。80年代90年代に産業の中心にもなってきますが、混雑して空気も悪くなり、公害のシンボルになったわけです。

これを韓国政府は、きれいな川に戻そうという復元事業を2003年から始めました。完成したのは2007年で、日本円にして約400億円がかかりました。復元を計画した理由は、高架道路がだんだん老朽化し、建て直すにもかなりお金がかかるということ。ソウルの歴史と文化の研究も確保したい。今、ソウルには昔の景観があまりない。東京みたいにビルが多くて、面白くない。そこを何とかしたいということと、ソウルに対する市民のプライドを高めるという理由がありました。川の周辺は昔からの商店街ですが、古くなってきました。これを経済面から活性化したいという意味と、ソウルの真ん中を流れる漢江（ハンガン）という大きな川を挟んで、江南はすごく発展しまして、江北は発展が遅れる。それで、経済格差を何とか均一的に発展させようという意図もありました。ここには東大門（トンデムン）という大きな商店街もあるし、鍾路（チョンノ）という若い世代が集まる場所もあります。明洞には南大門（ナンデムン）という大きな商店街もありますね。この川を復元することによって、人がたくさん集まるようになったのです。海外からも観光客が集まって、ソウルに行ったらここは寄っていく、そういう地域になりました。

今年5月に東京都知事石原慎太郎さんが韓国を訪問しまして、李明博大統領と会談をしたときに、清溪川を参考にして東京の隅田川を何とかしたいという発言もしまし

た。東京には隅田川がありますが、新潟にも信濃川があり、信濃川なりの歴史があると思います。新潟もそれを世界に発信する、そういう機会があったらいいなと思います。清溪川みたいにお金をかけなくても、信濃川は今見てもきれいな川ですから、いろんなイベントを作っておけば韓国、中国、ロシアなどいろんな外国からの観光客が集まるんじゃないかと考えまして、今日は新潟の魅力発見ということなので、清溪川とうまくつなげられたらいいなと思ったわけです。ご清聴ありがとうございました。

「水路について」 John Adamson [英国]

私の発表は私のふるさとレスターについてです。最初にレスターのシンボルマークを見てください。3匹の動物がいますね。一番左は牛、真ん中はキツネ、一番右は羊です。羊は、私のふるさとレスターにいっぱいいますが、昔はもっといました。何のために羊を育てるのでしょうか。私のふるさとでは、結構おいしいラムを作る。でも、ラムだけじゃなくて、ウールですね。300年前、産業革命が始まった。レスターの人たちは羊を新しい産業に使おうと考え、工場を作りました。でも、どういうエネルギーが必要でしょうか。もちろん、オイルと木が必要、でも、昔は川が必要でした。繊維産業の工場はいつも近くに川があった。この時代仕事があるので、たくさん若い女性たちはレスターに集まった。セーター、スカート、コート、いろいろウールの洋服を作る。洋服を作るには、デザインが必要です。だからファッションデザインスクールが工場の近くにできました。今の時代、誰もイギリスの作った服は買えない。パーカーだけ。でも、パーカーを見たら、メイドインチャイナかもしれないですよ。残念ですがそういう時代になりました。でも、レスターには今もデザインスクールがあります。

私は今年の4月まで長野県の岡谷に住んでいました。諏訪湖には、昔シルクの工場がありました。100年前、若い女性たちは結構集まった。苦しい状態でシルクを作りました。レスターとそっくりですよ。若い女性が工場で働いたときには給料が安く、厳しかった。何人かは諏訪湖に入り自殺しました。悲しいことが結構ありました。産業の革命について考えたら、このふるさとのためにいいことですね。でも、働き方は別のことですね。

レスターはだんだん酪農地区になり、ウールとラムだけじゃなくて、羊のミルクをとってチーズを作る。このチーズはとても人気のある伝統的なチェダーチーズ。これはブルーチーズです。ウールとチーズは、レスター以外でも売りたいじゃないですか。昔どういう風に、ウールとチーズを別の場所に運んだのでしょうか。昔はあまりたくさん道がなかった。あってもあまりよくない状態ですね。300年前、汽車はなかったし、もちろん車もなかった。でも、自然な川がありました。でも、レスターからロンドン、リバプール、この大きな港まで、川は繋がっていない。だからレスターの人は、運河を作らなくてはいけないと考えた。産業革命の時代にたくさん道と運河を作りました。船にウールと、チーズといろいろ作ったものを載せて、例えばロンドンの港、リバプールなど大きな場所まで運びました。でも、ロバート・ルイス・スティーブソンは汽車を作りました。その後で車もできました。だんだん運河は意味がなくなりました。今の時代にも運河はあります。でも運河は産業のためには使わない。私がこの間イギリスに帰ったときには、ちょっと金持ちなイギリス人がボートに乗っていました。すごくゆっくりでボートのホリデーができました。いろいろツーリズムのために使う。でも、一番大切なことは、この運河はきれいに守らなければいけません。

産業革命が始まったときには、川と運河はすごく大切な役割を果たしました。その運河と川がなかったら、工場は作れない。

いろいろと作ったものを運ぶことができませんでした。だから、この水がすごい大切なことだと思います。新潟と比べたらそっくりじゃないかな。川が近い。この大きな都市には港がある。本当の街を作るには、川があれば産業ができるんじゃないか。だから、交通、トランスポートについて考えてみました。

「ピッツバーグの橋そして新潟のダウンタウンの歩行性について」 Bethany 伊與部 [米国] (当日代理：山中 知彦)

3人目に講演予定だった伊與部・ベサニー先生ですが、きのう病院まで伺ってきたんですが、酸素吸入用のビニールの TENT をベッドの上に吊ってその中でお母さんから離れない気管支炎の治療中の赤ちゃんと一緒にいなくてはいけないということで、皆さんに謝って下さいということです。

彼女の故郷ピッツバーグは、またの名をザ・シティー・オブ・ブリッジと呼ばれているそうです。彼女はまず、ピッツバーグと新潟を比較してくれました。ピッツバーグを中心にするメトロポリタンエリアの人口・面積が、新潟市を中心とする新潟県の人口・面積にはほぼ等しいんです。気候条件も比較的近く、気温はピッツバーグがマイナス7から28に対して、新潟はマイナス1から30度、降水量も非常に近いものがあります。そこで彼女はピッツバーグと新潟について、街と川と橋の話をしたとスライドを用意してくれました。

これが彼女の生まれ育った街のダウンタウンです。ピッツバーグの位置は、フィラデルフィアからかなり内陸に入ったところで、ふたつの河川が合流してオハイオ川になる合流地点がピッツバーグのダウンタウンということです。街の発祥は、フォート・ピットという砦が川の合流点に築かれてそこから始まったようです。私は、小中学校のころ、ピッツバーグというと鉄鋼の街と地理で教わったんですが、私よりもはるか若い彼女は、鉄の街という記憶はないそうです。でも、彼女が調べてくれた古い

写真は、鉄鋼を中心とした工業都市の時代、初代のころの何本もの橋です。工場と関連する舟運が見られる写真ですけれども、1915年、27年にこのふたつの橋が架け替えられたそうです。ちょうど萬代橋が今3代目でしたよね。現在はこちらの2本の橋と、奥には何本もの橋がダウンタウンとその周辺の地域をつないでいて、これが都市図ですが、ちょうど砦があったあたりは現在ウォーターフロントの緑地公園になっております。私も15年ぐらい前にピッツバーグを訪れたことがあって、ここのウォーターフロントで休憩をしたことを覚えています。それと、対岸にも市街が広がっているという意味では新潟の都市構造に近いと思います。こちらがロバート・クレメント・ブリッジといいまして、ピッツバーグには大リーグのパイレーツの球場がありまして、ロバート・クレメントというのはパイレーツの高名な選手の名前だそうです。伊與部先生はこの橋の上で、現在の旦那さんからプロポーズを受けたという思い出の深い橋だそうです。

彼女は、広い歩道のある萬代橋の人の通りがとても重要な役割をしている点に着目をしています。ロバート・クレメント・ブリッジも球場で試合があるときは、全幅員が歩行者の橋になるそうです。やっぱりこういう橋が都市にとっては非常に重要だということでした。そして、ピッツバーグも川から花火を上げ、それが街の人にとっての1年の楽しみになっているというところはとても新潟と共通してます。これは今年の新潟祭のときにご両親が来て撮影した、萬代橋の上のお祭りの写真だそうです。ということで、彼女は新潟のダウンタウンについて、萬代橋が人中心の橋であるということ 키워ドにして、古町と万代の間を歩きながらその限界性を楽しむということがとても重要じゃないか、と。そして、自分もそのことによって、ピッツバーグにいるような、アットホームな感覚を新潟の街で味わっていますということを皆さんに伝えてくださいということでした。

4 新潟のまちの魅力発見（鼎談）

講師：権 寧俊、John Adamson、山中 知彦

山中 それでは残りの時間で少し意見交換をしていきたいと思います。この企画を立てて、お話をしやすい内容で、新潟のまちの魅力につながるトピックを選んでくださいとお願いしたところ、3人とも共通して川とか水に関するトピックを選ばれたんです。もうひとつの共通点が、それぞれの先生が街の歴史をとっても大切にしているということです。そのあたりから、後半は新潟のまちの魅力をもうすこし解き明かしていきたいと思うんですけど、まずアダムソン先生、イギリスのまちづくりは、それぞれの街に密着してシビクトラストとか、国土の保全についてもナショナルトラストとか、市民が中心になって保全活動を活発にやられていますよね。

アダムソン ナショナルトラストはいい団体だと思います。ナショナルトラストは、あなたがこの場所に建物を作りたいんだら古いスタイルで作らなければいけないと結構厳しいですね。8年前、スペインに行きましたが、僕はマクドナルドが結構好きで、時々ハンバーガーが食べたい。ホテルのフロントで一番近いマクドナルドはどこか尋ねました。フロントの人は、「あの道を通って、すぐ見えますよ。」でも歩いて、歩いても見つからなかった。どうしてでしょう。普通マクドナルドのサインは赤ですね。それはスペインではダメですよ。マクドナルドが伝統的なスペインのスタイルで作ってありました。それはいいな、と思った。

山中 芸妓さんの舞とか、芸妓さんと会話していただいて、新潟の街の伝統的な文化とか、今の新潟の街についてはどんな風にお感じになりました。

アダムソン 私は今年の4月から新潟に住んでいる。そんなに長い経験はない。でも、結構古い場所があるんですね。私の印象は、コントラストがはっきりですね。新しい建物があって、隣の建物は古い。でも、例えばスペインを見たら、シティーセンターは

古い感じばかりで、新しい建物の場所は向こうで。大きなコントラストはひとつの場所の中にあるということですね。

山中 スペインの場合は、昔城壁で都市が始まったあたりというのは歴史的な街区として基本的にコントロールされているんですね。それに対して新しいものが建つエリアというのはある程度外れたところに、意図的に定められている。それに対して、アダムソン先生が新潟の街のコントラストというのは、古町が古くて万代が新しいという意味じゃなくて、古町の中に古いものと新しいものがあるという意味だと思うんですけど、その新潟の新しいものと古いもののコントラストがあること自身が、アダムソン先生にとっては魅力になるんでしょうか。

アダムソン できればもっとスペインのようにタウンプランニングがあったほうがいいんじゃないかな。街を見たら絶対全部同じスタイルであつたらいいんじゃないかな。特にパチンコ店の建物が結構、ひどいスタイルですね。

山中 清溪川は必ずしも古いスタイルに戻したわけじゃないけれども、いったん高速道路を上にかぶせたところを全部撤去して、もう一度川を出したという、都市構造的には伝統をもう一度、地域の活性化につなげようという試みだと感じたんです。私もこの夏にソウルを訪ねたんですけども、いろいろ街の中に歴史的なものの再現をしているエリアもありますね。一方で江南地区みたいに、先ほど権先生が、東京みたいだとおっしゃったけども、そういうところがあるようなんですけども、権先生ご自身、ソウルの街のオールドアンドニュー、それと新潟のまちの魅力ってあたりをどんな風にお考えですか。

権 私の世代は、韓国が高度成長を成し遂げる、そういう時代でありました。だから、60年代から80年代にかけて経済発展しかありません。ソウルもいろんなところで開発

が行われまして、昔、小学校のときには川で遊んだり、そういう思い出もありますが、そこからもう、どこに行っても開発の工事をやったり、ビルを建てたり、そういう時代です。だから、どんどん川がなくなり、山がなくなり、そういうことをずっと見てきた世代ですね。それで、日本に来たら、空気もいい、水も水道水をそのまま飲むということを知ってすごく驚いたんです。新潟に来てもっと驚いたのは、米がおいしい、魚がおいしい、家では3人家族なんですけども、月に10回は寿司を食べに行ったりするんです。先ほど清溪川の話をしましたけれど、私が行った清溪川というのは汚い川で、それがふたをして高架道路になった、そういう記憶しかないんです。それが、2007年に復元されて、初めて清溪川に行ったらびっくりするほどきれいな川になっていた。今は少しソウルが安定する、そういう段階に入ったのかなという感じですね。そういう意味で、私は日本の街が好きなんです。特に新潟。私が新潟来るときにはいろんな先生が、あそこ、ひょっとすると抜けられないよと言われてたんですけど、今考えてみたらその意味がよくわかりました。食べ物もおいしい、空気もいいと。それと、どこにいても水がある。で、海に行ける。川もある。本当にすてきな街だなという感じですね。私は花粉症なんです。だから、3月から5月までは大変なんです。東京にいるときには何回も倒れたことがあるんです。それが、不思議に、新潟に来てから消えちゃったの。

山中 私も全国でいろんな都市を仕事でも見て回ってきたんですけども、新潟の都市の規模に対する周辺の自然との緊密性というんですかね、それは明らかにあると思うんです。多分それは信濃川という大きな川が風の道になって、その中に何本ものストリートがあって、そこがやっぱり周りとの環境をつなぐ経路として生きているから、中心市街地の割に周りの自然とつながり、

反対側に海もありますからね。そういう近しさというものがあって、住んでおられる方はあまり自覚はされてないけども、外から来ると感じるんですよ。

権 新潟市内だけで見ても、こんな街は日本国内でも海外でもあんまりないかなという感じなのは、山と海と都会と農村がうまく組み立てられているような感じがします。ちょっと行けば、古町や万代に出て、もうちょっと行けば農村地帯が広がって、もうちょっと行けば山がある、もうちょっと行けば海があると。私が行ったところの中では一番いいまちだったなと思っています。だからそういう意味では、もっといいまちづくりはしなきゃいけないかなという、それもあります。

山中 新潟の中心市街地、つまり、万代、古町界隈はとても恵まれた形を持ってんだけど、いわゆる古町の地域の活力が減ってきていると言われてますよね。どういう風に地域活性化を考えていくかという切り口として、割とニュースなんかで、即効性のある経済政策的な分野が多く語られていると思うんだけど、3人の先生のお話から引き出せるのが、もうちょっと長いスパンで街の魅力を磨いていくためには、歴史的なことだとか、あるいは、新潟の街は、私が外から来て思ったのは、市民活動が非常に盛んなんです。これは、外からはほとんど見えなくて、こちらに赴任してから初めて知ったんですけども、そういう土壌を生かして魅力を洗練させていくということができると、うまくいくような気がするんですけども。アダムソン先生がよく授業でおっしゃる、グローバリズムの中のローカリズムみたいなものを、どうやって魅力として残していけるのかというあたりは、いかがでしょうか。

アダムソン キーワードは誰が責任取るかでしょう。市役所だけじゃなくて、いろいろ個人的な責任があるんじゃないか。家を建てる時、家をリフォームするときには、自分の責任もある。この間村上へ行きました。村上の祭りで、いろいろな店がオープンになる。誰がそのアイデアを作ったで

しょう。店の人たちが集まった、どういう風に自分の街をプロモーションするか。そういう風に、自分の伝統的な街をプロモーションしてはどうでしょうか。店の人のアイデア、それは経済の発展じゃないか。店に入って、なんか買って、そういう風に伝統的な店が続けられるんじゃないか。だから経済の発展と伝統は、手をつないでいくことができるんじゃないか。それ、自分のイニシアチブじゃない。

山中 村上は、新潟に比べてスモールスケールなんで、それぞれのエリアの中で、市民が自分の責任によって動いているという、そういう見え方はとても見やすい街だと思うんです。新潟にも一生懸命まちづくりの活動、地域おこしの活動をやっている方がおられるんですけども、ちょっと街のスケールが大きいので見えづらくなっていると思うんですよ。新潟市は全国で一番多くの市町村がひとつの市になったんですね。だからひとつの市の中にも合併前のそれぞれの中心がいっぱいあって、そのことによって見えづらくなっている部分を、それぞれのところがそれぞれの責任において、アダムソン先生がおっしゃったような動きが形になって現れてくると、もともとの持っている形は魅力的だし、潜在能力はすごく感じるんです。

権 新潟というのは、いろんなところから海にも、山にも、農村にも行ける、そういう街だと思うんですけど、そういう魅力はほかのところに住んでいる人はあまり知らないんじゃないかなと。特に外国に住んでいる人は知らない。新潟県立大学は韓国で学生の発表する機会がありまして、新潟から来ましたと言ったら、「新潟どこ」という風になるんだけど、新潟のすばらしいパワーポイントを使って発表すると、「えー、こんなところがあるんだ」って発見が出ます。韓国は最近ゴルフ人口が増えてるんですが、かなりお金がかかる。でも、国内でできるお金で新潟に来てゴルフやると、温泉も楽しめる。スキーも、ここにくれば温泉もできる。そういう魅力があるんです。それを友達に言うと、「えーっ」と

驚く。もうちょっと、そういう具体的な魅力の発信が必要なんじゃないかな。学会で別府に行ったことがあるんですけど、驚いたのは、どこに行っても、英語、中国語、韓国語で案内が出ているんです。ホテルもどこに行っても韓国語、中国語、英語が通じる。やっぱり新潟もアジアの拠点だからそういう風に、表示とか、言葉ができるような人材を養成して、世界に発信すれば、もっと活発な、賑やかな街になるんじゃないかという感じもします。

アダムソン 経済発展について考えたら、他のアジアの国と近いでしょう。だから、ビジネスのチャンスが結構あるんですね。港があるでしょう、だから初めて新潟に来たときには、ロシア人を見た。多くの国の人たち、何のためにここに集まった、やっぱり経済的な理由があるでしょう。だから、国際的なイメージがあるんですね、他の県と比べたら。

山中 都市のロケーションの魅力というのかな、つまり、今ずっと話してたのは都市の内部の話なんだけども、そうじゃなくて、新潟市が立地している条件がすでにある意味で、アドバンテージを持っている。そこをどうやって街の中の魅力づくりに生かしていけるかってのは、これから議論の余地があるところだと思うんです。特に今話題になっている、中心市街地の衰退をどうやって食い止めて、元気を出していくかというところに、街の中の構造だけじゃなくて、そういうロケーションの問題をどうやって組み込んでいくかというのは。

それではちょうど予定の時間になりましたので、後半の意見交換は、このぐらいで閉じさせていただきたいと思います。